

「特集」

案内人 中原豊 旅人 文 内堀弘

# 山口、天才詩人の故郷 在りし日の中原中也

中也が故郷を離れて100年余り。町の風景は変貌したが、その先には当時と変わらず山が鎮座する



- 22 INTRODUCTION 16歳少年の道行き
- 24 VOYAGE1 中原中也、肖像写真の旅路
- 30 VOYAGE2 小林秀雄宛、署名本の旅路
- 32 VOYAGE3 中垣茂樹旧蔵、アルバムの旅路
- 38 中也の青春時代が、スクリーンで甦る——  
映画監督・根岸吉太郎さん かく語りき
- 40 在りし日の中原中也（案内図）

14 Interview しなやかな挑戦 文 森綾  
生物地球化学者

56 おいしいもんには理由がある 文 土井善晴  
米を味わう堅焼きせんべい [埼玉県草加市]

- 7 京都の路地まわり道 文 千宗室  
酒を選ぶ
- 11 ひとときエッセイ「そして旅へ」  
文 瀬尾まじこ  
私が旅に出る理由
- 13 古書もの語り 文 内堀弘  
新宿武蔵野館
- 13 柳家喬太郎の旅メシ道中記  
ドルチエカリーナの  
オランジエット [長野県伊那市]
- 44 今日もミュージアム日和 文 栗原祐司  
ちひろ美術館  
[東京都練馬区、長野県北安曇郡松川村]
- 48 地元にエール これ、いいね！  
ホームズパン [岩手県盛岡市]
- 51 新幹線で建築さんぽ 文 甲斐みのり  
ベルナール・ビュフェ美術館 [三島駅]
- 52 帰ってきた！ みほとけさんの  
奈良仏めぐりユニーク編  
璉城寺・阿弥陀如来立像 [奈良市]



『にほんの詩集 中原中也詩集』  
2022年（角川春樹事務所）と  
1976年に刊行された復刻版  
の『在りし日の歌』  
写真＝阿部吉泰（上も）

- 60 旬 News & Topics
- 62 美 Art & Entertainment
- 64 遊 Event & Festival
- 66 旅の小箱 from JR東海、JR西日本
- 67 世界遺産・清水寺で特別な体験を  
霊峰富士が舞台のリアル謎解きイベント
- 68 お歳暮や冬のご挨拶に  
季節を感じる、いいものを  
山口蓬春記念館 初冬企画展  
蓬春絵画がでるまで——
- 69 北陸ステイネーションキャンペーン  
北陸の美酒を心ゆくまで
- 70 「KITTLE大阪」で  
地域の魅力を再発見！
- 71 癒やしの旅へ「南九州DE超回復」  
HEALING JOURNEY  
in 熊本・宮崎・鹿児島
- 72
- 74 ひととき倶楽部  
読者からのお便り  
今月のプレゼントなど
- 76 次号のお知らせ
- 78 ルートマップ  
東海道・山陽新幹線時刻表

日本の近代文学史に大きな足跡を残した

詩人・中原中也——。

30歳で夭折した彼が

16歳を迎える春まで過ごしたのは、

山陽路随一の温泉郷として栄えた

山口市湯田温泉でした。

詩歌書専門の古書店主で

エッセイストの内堀弘さんが、

生家跡に立つ中原中也記念館をはじめ、

ゆかりのスポットを巡ります。

今日に残る貴重な資料を足掛かりに、

彗星のごとく駆け抜けた

中也の生きざまに光を当てます。



湯田温泉で創業300年以上の歴史を有する老舗旅館、松田屋ホテル(27頁)。中也の生家からほど近い場所にたたずむ

† 特集 †

# 山口、天才詩人の故郷 在りし日の 中原中也

案内人＝中原豊

Nakahara Yutaka

旅人・文＝内堀弘

Uchihori Hiroshi

写真＝阿部吉泰

Abe Yoshitaka



旅人・内堀 弘さん

うちぼり ひろし／1954年、神戸市生まれ。詩歌書専門の古書店「石神井書林」を営む。著書に『ボン書店の幻』（ちくま文庫）、『古本の時間』（晶文社）など。2014年から小誌で「古書もの語り」を連載中



案内人・中原 豊さん

なかはら ゆたか／中原中也記念館館長。1958年、山口県下関市生まれ。山口大学文学部（現人文学部）卒業後、九州大学大学院修士課程修了。2009年4月より現職。中原中也を中心に日本の近代文学を研究。共著書に『中原中也を読む』（笠間書院）など



肖像写真と表紙 中原中也記念館蔵

中原中也といえたいこの写真が使われる。私たちも、中也といえはこの顔を思い出す。展示されていた写真に、小さな驚きがあった。それは、よく見えていた写真には、当たり前前だが、オリジナ

ルがあって、それはこんな形をしていたのかということだった。写真は手札判（10・5×8センチ）ほどの小さなもので、それがお見合い写真のように台紙に貼られている。その表紙（と言うのだろうか）には「東京銀座出雲町 有賀席五郎撮影場」と印刷されていた。

訪ねた日は特別企画展「中也とランボー、ヴェルレーヌ」を開催中だった。フランスの詩人ランボーは、15歳で詩作をはじめ、天才といわれながら20歳の頃には詩を離れる。それから各地を放浪し30代で逝く。「風の靴を履いた男」と称したのはヴェルレーヌで、中也はこの詩人から大きな影響を受けた。

展示品の中に、中也の肖像写真があった。黒い帽子を被り黒いマント姿で、こちらをじつと見つめる。ランボーを気取った一枚だ。



ミュージアムグッズ  
中也の詩の一節が書かれた鉛筆の7本セット（左）と中也の詩集や創作ノートの豆本5冊。各50ミリ×35ミリの可愛いサイズで、精巧な作り

VOYAGE 1

# 中原中也、肖像写真の旅路

おいでませ!

# 湯田温泉 ぶらり散歩



貴心



中也通りには  
こんなマンホールが!

貴心(きごころ)では、  
寿司をメインに、おま  
かせコースで料理を提  
供する。写真はお屋の  
コースより。お酒はと  
く日本酒に力を入れて  
いて、特別な夜を過  
ごしたい日におすすめ  
の一軒。完全予約制



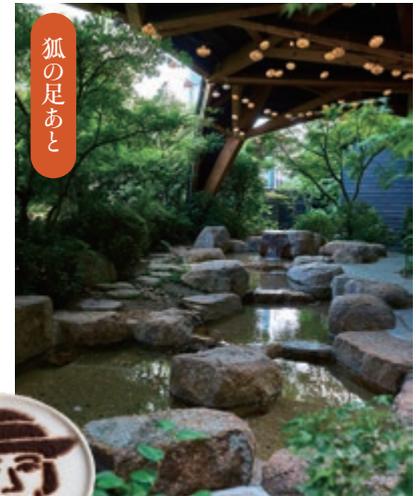
中也は土産として山口外郎(ういろう)を買求めていたという。御堀堂(みほりどう)は1927(昭和2)年創業で、こしあん風味の白外郎のほか、黒砂糖入り、抹茶入りの3種類がそろう。独特の弾力と滑らかさが特徴



御堀堂  
湯田店



湯田温泉を中心に、山口の旅の情報を提供する施設で、散歩前に訪れたいスポット。露天の足湯(写真)をはじめ、3つの足湯を備える。カフェスペースでは、中也の肖像画のラテアートが楽しめる「中也ラテ」をぜひ! 地酒の飲み比べもできる



狐の足あと



維新の志士たちが逗留した宿として知られる老舗 [上] 冬の料理のイメージ [下] 大正時代建造の本館は木造2階建ての数寄屋風造りで、客室から国の登録記念物に登録された名庭を望める



松田屋ホテル

# 小林秀雄宛、署名本の旅路

**小** 林秀雄は、中原中也にとって特別な存在だった。18歳の春、中也は恋人の長谷川泰子と上京する。小林は東京で文学を語り合える友だった。

その小林に中也は恋人を奪われる。中也と泰子の下宿を、小林が初めて訪ねて来た日のことを、泰子はこう回想する。

「その人は傘を持たず、濡れながら軒下に駆けこんで」きた。それは「雨のなかから現われ出たような感じでした。雨に濡れたその人は新鮮に思えました」。

2人は惹かれ合い、やがて一緒に暮らす。小林の言う「奇怪な三角関係」（人間は憎み合う事によっても協力する）がはじまるが、しかし三角関係の中也と小林は、嫌になるぐらい互いの才能を知っていた。

中原中也記念館には詩集『山羊の歌』の小林秀雄に宛てた署名本がある。

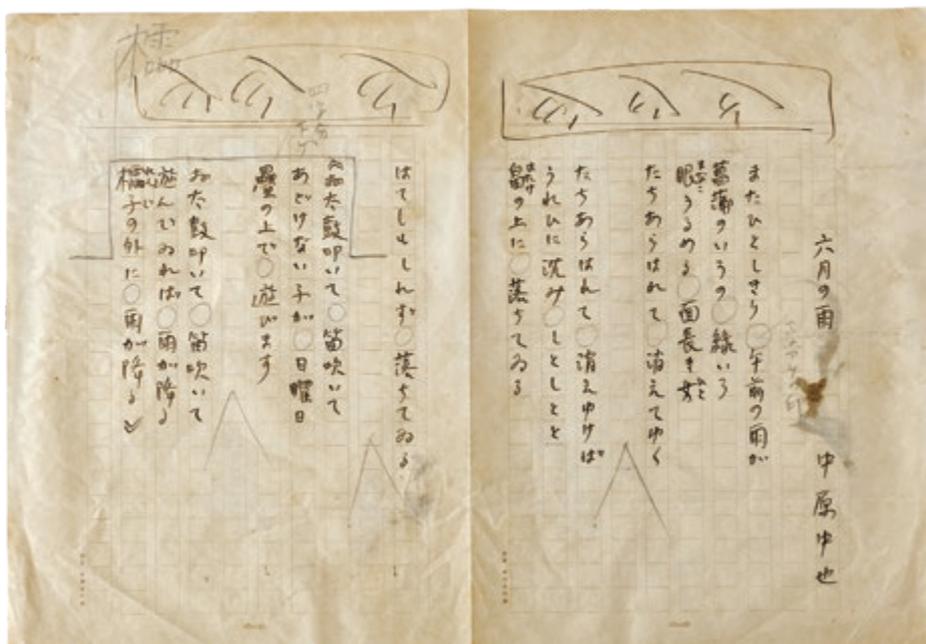
『山羊の歌』は中也の最初の詩集で、1934（昭和9）年に限定200部が刊行された。好事家向けの少部数本ではない。予約募集をしても十数人の申し込み

しかないので、これぐらいの部数しか作れなかったのだ。簡素な造本だが、堂々とした第一詩集だ。

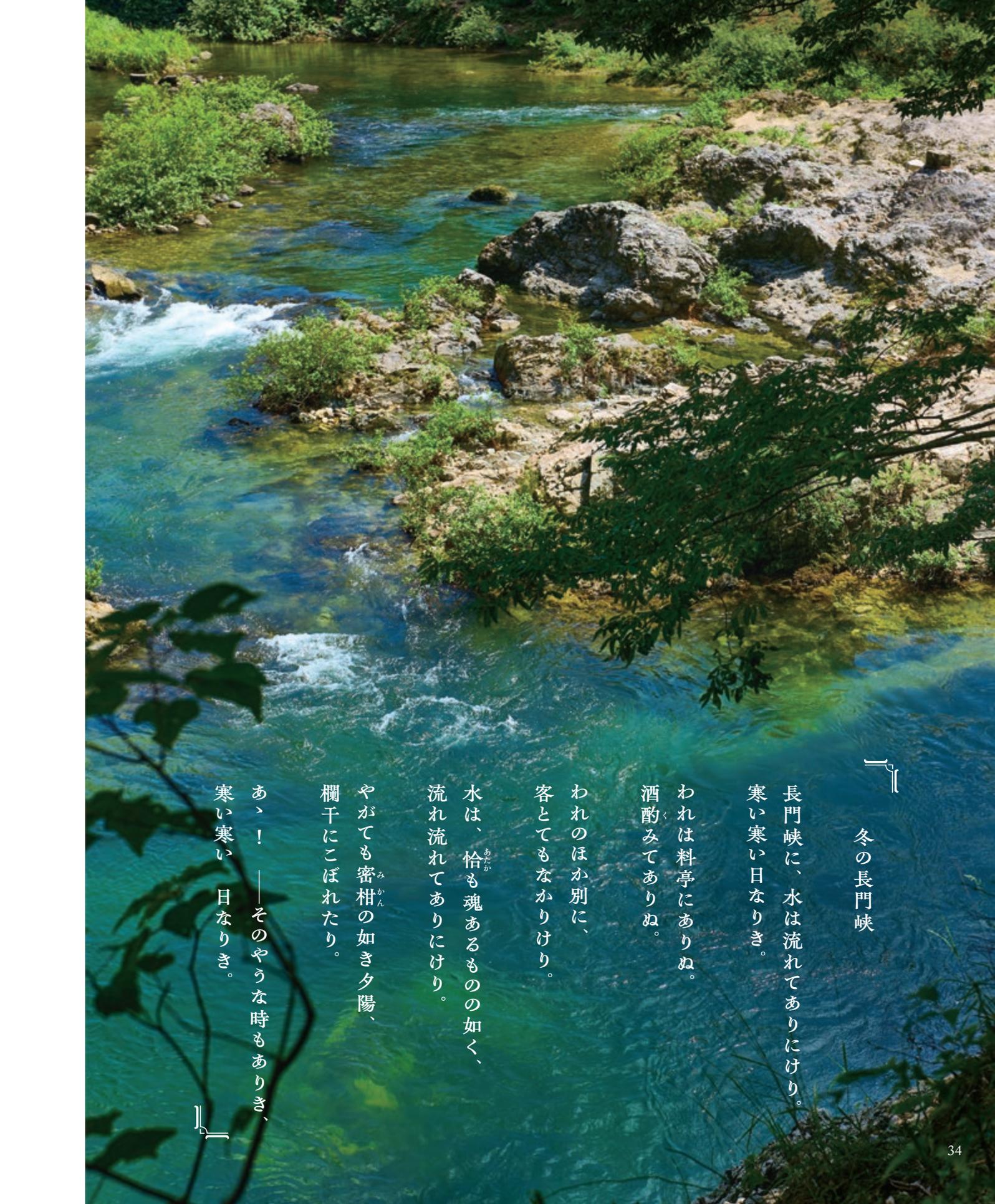
27歳の冬、ようやく出来上がった詩集に「小林秀雄様 中原中也」と署名をした。そのとき、中也の中をどんな影が通り過ぎたのだろうか。

中原館長によれば「この本は小林家に遺されていたものではない」そうだ。

そこには、こんな経緯があった。小笠原長寛ちゅうかくという、中也より3歳ほど若い文学青年がいた。東京を離れるとき、小林の家を訪ね、この『山羊の歌』をもらった。それは戦地へ向かう彼へのはなむけだったのかもしれない。「いまは函も古びて壊れかけている」その本は、「戦争を越え、満州から生還し」た「長い歳月の間、幾百回もとり出して眺めた」ものだという。小笠原は、1冊だけ出した自分の詩集にそんな回想を書き残した。そして、1972（昭和47）年に亡くなる。それから20年以上が過ぎて、記念館が開館すると「ご遺族から連絡をいただき、寄贈していただきました」という。



[右]『山羊の歌』小林秀雄宛署名入り。印刷を終えたところで資金が尽き、刊行までに2年を要した  
[左] 自筆原稿「六月の雨」。「文学界」（1936年6月号）に掲載され、好評を得た。ともに中原中也記念館蔵



冬の長門峡

長門峡に、水は流れてありにけり。  
寒い寒い日なりき。

われは料亭にありぬ。  
酒酌みてありぬ。

われのほか別に、  
客とてもなかりけり。

水は、恰も魂あるものの如く、  
流れ流れてありにけり。

やがても密柑の如き夕陽、  
欄干にこぼれたり。

あゝ！ —— そのやうな時もありき、  
寒い寒い 日なりき。

# 今日もミュージアム日和

6

全国各地のミュージアムの  
常設展示を中心に、  
「今日会える」  
「今日会える」  
珠玉のコレクションを厳選紹介



文 栗原祐司  
Kurahara Yuji



くりはら ゆうじ/1966年、東京都生まれ。国立科学博物館副館長。これまでに全国6800館以上の博物館を訪ね歩いてきた「ミュージアム・フリーク」。著書に『教養として知っておきたい博物館の世界』(誠文堂新光社)など

## 子どもの幸せを願い続けた 画家ならではの空間づくり ちひろ美術館

〔東京都練馬区、長野県北安曇郡松川村〕

### 世界最初の絵本美術館

いわさきちひろの名前は知らなくても、水彩絵の具によるやわらかで独特な色調の絵を見たことがある人は多いのではないだろうか。いわさきちひろは、子どもを生涯のテーマとして描き続けた絵本画家だ。モデルなしで10カ月と1歳のあかちゃんを描き分けたという優れた観察力とデッサン力を駆使して、9600点を超える作品の中に子どものあらゆる姿を描き出した。今年はいわさきちひろの没後50年に当たる。

ちひろ美術館・東京は、1952(昭和27)年に東京都練馬区下石神井に建てら

ちひろ美術館は2館あり、同じ理念のもと運営されている

[上]ちひろ美術館・東京は、ちひろが実際に暮らしていた都内の閑静な住宅街に立ち、彼女の存在をリアルに感じることができる

[下]安曇野ちひろ美術館は、北アルプスを望む雄大な景色の中でアートに触れて非日常感に浸れる写真提供=ちひろ美術館



長野県の安曇野には大自然に囲まれた第2のミュージアムも!

れたちひろの自宅兼アトリエ跡にある。当時の日本では、絵本を美術の一つのジャンルと捉えておらず、絵本画家の原画を美術作品として残していくためには自力で美術館を造る以外に方法はなかった。そのため、ちひろ逝去から3年後の1977(昭和52)年9月に、世界で最初の絵本美術館として同館が開館した。最寄り駅は西武新宿線・上井草駅で、実は筆者は同館まで自転車で数分の場所に住んでいたため、開館当初から何度か訪問している。いわば「地元」の美術館で、当時は近所の瀟洒な家にお邪魔するような感じだった記憶がある。その後大きく増築・改修され、現在は当時の雰囲気こそ失われているものの、全館バリアフリーとなり、車いすの来館者も増え、子どもからお年寄りまで楽しめる憩いの場となっている。ちひろ愛用のソファに座って絵を見ることが出来る展示室や、忠実に復元されたアトリエ、ちひろが愛し育てた草花や樹木が植えられた「ちひろの庭」など、ちひろを身近に感じながら、彼女の作



県指定文化財 鎌倉時代(13世紀) 木彫彩色

## 阿弥陀如来立像

下半身に本物の袴を着けたご本尊「阿弥陀如来立像」。袴は西陣織で、50年に一度、未婚女性の手によって取り換えられる。衆生を限なく救うための指の間の膜(纒網相)の表現も際立つ

「帰ってきた!」  
みほとけさんの



～ユニーク編～

第3回

### 【 璉城寺 】

政治・文化の中心地として多くの寺社が置かれ、今なお、たくさんの方々が参拝者を集める日本のはじまりの地・奈良。1300年の歴史を誇る奈良で仏像大好き芸人・みほとけさんが心惹かれる「ユニークな仏像」をご案内します。



みほとけ / 仏像大好き芸人。慶應義塾大学卒業。ミス鎌倉などの活動を経て、本名の「みほ」と大好きな「ほとけ」を掛けたみほとけの名で活動。SNSなどで、寺社や仏像の魅力を伝えている。

「メジャー仏像が勢揃いする奈良ですが、一方で知られざるユニーク仏像も多いんです」と、みほとけさん。仏教思想の受容の移り変わりとともに、多様な姿で表されてきた古都・奈良の仏像。今回は鎌倉時代に造られた「裸の仏像」に会いにゆきます。

ならまちの一角にある西紀寺町。町名にある「紀寺」とも呼ばれるのが、奈良時代に創建され、平安時代に紀有常が再興したと伝わる璉城寺だ。みほとけさんをはじめて拝観するというのがこちらのご本尊「阿弥陀如来立像」。上半身は白肌を露わにし、下半身には袴を着けた、珍しい裸形像である。仏像は通常、衣や甲冑などが一体となった形で造られるが、なかには半裸や全裸の像に実際の布の衣を着せて祀る「裸形着装像」が存在する。こうした表現は平安時代後期から鎌倉時代にかけて多く、背景には、仏像を生ける存在として捉える「生身信仰」があるといわれる。

おいしいもんには  
わけ  
理由がある

第72回

文 ■ 土井善晴

Doi Yoshiharu

写真 ■ 荒井孝治

Arai Koji

炭火にかけた金網で、白い  
せんべい生地を何度もひっ  
くり返す。炭火の焼きムラ  
がなんともおいしそう。小  
宮せんべい本舗にて

江戸時代、奥州・日光街道の草加宿そうかしゆくにある茶屋が、売れ残った団子を焼き餅にしたのが草加せんべいの始まりとか。

# 米を味わう堅焼きせんべい

《埼玉県草加市》

「ええなあ。手焼きせんべいのように、よく焼けてるわ」。両手で持って、裏を返して眺める焼き物（土器や陶磁器）の見立て

です。陶器はなにより「焼き」が大事。手焼きせんべいのような「焦げ」は、表面や釉薬のかかっていないところに現れる茶色い結晶。これは登り窯で薪で焼成した際にできるもの。ガス窯や電気窯では生まれません。これが焼き物の醍醐味です。

せんべいのおいしさは手焼き。食べるまでもなく、焼き物好きの観点からすれば、その焼きの見事さから、「おいしいに決まっている」と言い切れます。目の喜びはそのまま香ばしい味につながって、嗅覚、味覚の満足は後からついてくるものです。

## せんべいたウン・草加を訪ねて

さて今回は、草加せんべいで有名な埼玉県草加市を訪ねました。せんべいを商うお店が点在しています。

皆さまご存じでしょうが、一応おせんべいとおかきの違いをおさらい。おせんべいは粘りの少ないうるち米、おかき（あられ）は粘りの強い餅米が原料です。ゆえに、

おかきは焼くと膨らみ小気味がよい。おせんべいは堅く、噛むうちに米の風味が広がります。

草加の歴史は古く、奥州・日光街道の宿場町として栄えてきました。平坦な土地に、中川、綾瀬川をはじめ多くの河川や水路が流れている草加は、豊かな水と肥沃な土壌に恵まれた穀倉地帯であり、大消費地の江戸に隣接する米どころでもありました。さらに近くには、醤油の一大産地である下総（千葉北部）があつて、そもそもせんべいが名物になる条件が整っていたのです。

旧街道沿いに「小宮のせんべい」の看板塔が目立っていました。暖簾のれんをくぐると明るい物販コーナーは天井が高く、老舗らしく古い梁がありました。「いい匂いがするな」と思ったら、脇の上がり櫃かまどの向こうにしつらえた焼き窯で、職人さんと向かい合わせになって、若ご主人の菊地友成さんがせんべいを焼いておられました。

初めて見る手焼きの仕事に見とれてしまいます。炭が入った四角い焼き窯に網を置き、生地を並べて、順々に返すのです。金箸で挟んで絶えず返す。返すと白い生地



草加は、日本橋から白河（福島県）までを結ぶ奥州街道の宿場町として栄えた。1689（元禄2）年には松尾芭蕉が「おくのほそ道」の旅の途中で足跡を残している。市内を流れる綾瀬川沿いには、「千本松原」と謳われた往時を再現した松並木が約1.5キロにわたって続き、水と緑が織りなす景観が見事。百代橋（ひやくたいばし）と名付けられた太鼓橋を渡った土井さんも、江戸時代の旅人気分

どいよしはる／1957年、大阪府生まれ。料理研究家、十文字学園女子大学特別教授。NHK「きょうの料理」に出演。『一汁一菜でよいという提案』（新潮社）、当連載をまとめた『おいしいもんには理由がある』（ウェッジ）など著書多数。